

私は「キャンサー」

根来 霽子

手足の長い黒装束の男が数人、いや数は定かでない。

薄明の中をうようよとうごめいている。横たわっている私を見下ろし、両腕をつかんで、しきりに自分のほうに引き寄せようとする。私はそのひよろ長い手を振り払おうとして必死にもがく。いやだいやだと叫んでいる。しかし、振り払おうとしてもその黒い手は執拗に私の腕をつかみ、力強く自分のほうに引きずり寄せようとする。苦しい、痛い、重油のように重くのしかかる雲を押し分け、呼吸をしようとして必死だ。苦しい、苦しい！

「目が覚めましたか、大丈夫ですか」と私の名前を呼んでいるかすかな声。首を締め付けられるような息苦しさと同時に激しい痛みにおそわれて目を開いた。「麻酔から覚めたようです。すぐに痛み止めの点滴をしましょう」と男性の声。看護士のようにだ。

「よかった、ここは病室よ、分かる？」と娘の声が遠くのほうから聞こえる。やっと状況が分かった。私は手術を受けて病室に運ばれ、麻酔から覚めたのであつ

た。それから一昼夜、術後の痛みと格闘することになる。よろよろと歩いて手術台に上がり、酸素マスクをつけられるまで、まったく無神経なほど手術に対して無防備だった自分が悔やまれる。肉体にメスをいれるということとは、生身の身体にとつて、大事件なのだ。ひたすら夜明けを待つあの時の苦しさを思い出すともう手術はするまいと強く思ったものだった。

人工的に眠らされ、意識を無くされ、その間に私の前に現れた黒い男たち、あの時彼らの手を振り払って私は麻酔から覚醒した。もし、引きずられてついていたら私はどうなったことだろう。もしかして違う世界に足を踏み入れていたのだろうか。ある病人が、手術は成功したが、麻酔から覚めることはなかった、という怖い話を聞いたことがある。後日、生々しく体験したその時の名状しがたい苦しみを私は自分の「臨死体験」として得々と友人、知人に語った。人は生死の間をさまよったときに体験するという、臨死体験。ある人はお花畑を見たと言い、また、深い穴にまっしぐらに落ちていくような体験をしたという。アメリカの精神科医エリザベス・キューブラー・ロスの『死ぬ瞬間』という本が話題になったことがあった。また立花隆に

も『臨死体験』という同様の著書がある。世界中の、何かの原因で危篤状態に陥り、生還した人々にインタビューして生と死のはざまに体験したことをまとめた本で私も一時熱中して読んだ記憶がある。

私の身近にも、意識不明の重体から奇跡的によみがえった人たちが体験したこととして、あの世と此の世の境界を示す三途の川向うから、すでに亡くなっているが生前親しかった身内がしきりに呼んでいるが、結局川を超えることなく戻ってきたら意識が戻ったなどという話題を聞くこともめずらしくはない。私も、まったく思いがけずわが身に起きたこの体験を、「臨死体験」だと周りの友人に話しまくった。あらゆる宗教に無関心な私が、わがこととして無我の境地にあって垣間見た恐怖を実感したのである。大抵の人は感心し、同感して聞いてくれたが、ある友人は冷めた声でいった。「ただ単なる夢だよ、幻覚だよ」と。そうなのだ。それはメスを入れられた肉体が悲鳴を上げたときの悪夢だったかもしれない。私は生死を分けるような手術を受けたわけでもなく、ごくありふれた単純な治療で、とても「臨死」などというおおげさなものではなかったのだ。

しかし、私にとってその体験はまさに青天の霹靂、

人生の重大事であり、あの時の黒いシルエツトが、何かの折にありありと脳裏に再現されるのだ。

ある日を境にして私は「キャンサー」になった。すなわち癌、癌患者である。それは突然やってきた。女性だけのサークル仲間の食事の席で胸の「しこり」のことが話題になり、高齢になっても定期検診をうけるべきという結論になった。検診をもう何年も受けたことのない私は何気なく触れた胸に明らかに「しこり」を確認した。まさか、とまず思う。更にこの年で、と思う。しかし明らかに「しこり」に触れるのである。ありえないと思い、怪しいと思い、揺れる動揺をおさえて一か月ほど放置していた。その間、上野の美術館に、以前から心待ちにしていたクリムトの絵を見に行ったり、その一週間後には神奈川近代文学館で「太宰と清張、中島敦と芥川賞」という講演を聞きに行ったりと、忙しく過ごして「しこり」のことは忘れかかっていた。

しかし、また翌月のその会合で同じことが話題になった。最近はずが欧米化し、高齢でも乳癌患者が増えているという。野菜嫌いで肉食系の私は食生活ではまさに思い当たることだらけなので、普段怠っている

検診をこの際受けておいたほうがいいだろうと思いたち、近所の乳腺外科クリニックを訪れた。マンモグラフィ、エコー、細胞診の結果、真正正銘、カテゴリー5のキャンサーを宣告されたのである。

まず自分の年齢を考えたら。放置してもあと幾年でもないだろう余命を考えると動揺はなかった。私はとても元気だったし、良く歩いて行動的だった。高血圧もなく、糖尿病なし、血管年齢は10歳若いというのが自慢だった。コレストロールが若干高めだったが、これは食事のせいだということは自覚していた。胃と腸の検診は毎年うけていたし、健康上何の問題もないと自負している私が乳がん検査の結果、ある日突然キャンサーになろうとは。

乳がんは女性の癌の一位をしめているそうで私の周りにも何人かはいる。あくまでも他人ごとと思っていたその癌には罹患したのである。クリニックの先生はさっそく紹介状を書いて精密検査を受けるように総合病院を紹介してくれて、これからすぐに出向くようにという。あたふたと駆け込んだ病院での様々な検査。何時間にも及ぶ検査を終えて、一週間後に結果を伝えるということになった。そして一週間後、家族同伴の面接で私の手術の日程がきまったのである。

むすめは、癌はがん専門病院で治療を受けるべきだといったし、友人も別の病院でもセカンドオピニオンを受けたらと忠告してくれた。が、この暑いのにこれ以上同じ検査をくり返すことにウンザリしていたので、最初に診察してくださった先生を全面的に信頼することにした。命に関しても私は無精であった。要するに他の病院を再受診するのが面倒くさかったのである。

一定のレベルの病院であれば医師の技術にそれほど差はないだろうと自分を納得させた。まさにためらう間もないほどのあつという間の出来事であった。

8月の暑い日、私は手術を受けた。次女と孫娘が立ち会ってくれた。24年間、一人暮らしの生活に慣れていた私は、離れて住んでいて普段あまり気づくこともなかった娘や孫たちが、いざとなるとこんなにも心配して力になってくれるのだと、「家族」というものがありがたさを痛感した。仕事をもって忙しい娘だが、一時間あまりの時間をかけて何度か病院に足を運んでくれた。24歳の孫娘の活躍もすごいもので退院後は彼女のお世話になりっぱなしだった。最近まで子供だと思っていた孫が、こんなにも力になろうとは、世代交代、本当に私は消えささっていく無力な老人で、次の世代は活気ある孫たちのものだど痛感したのだった。

外科は手術が終わればあとは体力の問題で、ついこの間までは考えられなかったことだが、私は術後3時間経って、もう自分の足でトイレに行かされた。もちろん看護師が付き添ってのことだが。できるだけ早く動いたほうが傷の回復が早いという。血栓の予防にもなるという。私はものすごい形相で夜が明けると5回、看護師に支えられながら自分の足で歩いてトイレにいった。トイレに行くという何ともありふれた行動がこんなにも深刻で重大事だということに改めて実感した。

それが功を奏したかどうか、私の傷と体力は順調に回復し、11日間の入院生活を終えて退院したのであった。病院には患者様の声を聴くという投票箱があった、私は次のように書いて投票箱に書いた。

「8月某日、乳癌の手術をしていただいたものです。おかげさまで順調に回復し、明日退院の日を迎えます。入院中は先生方、看護師さん方に大変お世話になりました。ことに手術当日、苦しくてわがままを言う私に厭な顔をすることなく深夜まで介護してくださいました。〇〇さんに心からお礼を申し上げます。5階の病棟はロケーション抜群、病室の窓から日夜景色を楽しみました。ことに夜景はすばらしい。」

ほんとうにいろいろとありがとうございました。わすれません」

乳がんを患った数多くの有名人のなかで、生還することのできなかった2、3人の歌人の名前が浮んでくる。真つ先に、私にとつて強烈な印象のある中城ふみ子の『乳房喪失』がある。私が20代のころ、彗星のように歌壇に現れて一瞬の光芒をはなつて散つていった麗人。北海道帯広市に生まれた中城ふみ子は歌人として、また奔放だとされる多くの恋の中にあつて前衛的な短歌を数多く読んだ。1954年、31歳の若さで両乳房を癌におかされ、歌集『乳房喪失』の発刊後、一か月後に世を去った。名声を得たばかりの無念の死だったと思う。のちに同じ北海道出身の作家渡辺淳一はそのセンチシヨナルな生涯を『冬の火花』という小説で描いている。歌には全くの素人の私にも胸を抉るものがあり切ない。次の歌は帯広市緑が丘公園内に立つ歌碑に刻まれている。

冬の皴 寄せいる海よ 今少し
生きて己の 無残を見んか

最近の歌人では河野裕子がいる。夫、永田和宏とともに戦後の歌壇のトップの座を占めて華々しく活躍し、多くの相聞歌を詠んだ。永田は朝日新聞の歌壇の選者（現在も）、河野は毎日新聞の選者を務めていたが、2000年乳がんを患い、鮮烈な表現で闘病の苦しさを詠んだ。

『歌に私は泣くだろう 妻河野裕子闘病の10年』は発病から亡くなるまで歌を詠み続けた夫婦の愛の物語だが内容は決して甘いものではない。それどころか、この永田和宏の手記を読むと、鬼気迫るとはこのことかとさえ思う。再発への不安、薬の副作用もあって荒廃した精神状態にあり、荒れ狂う妻を夫はただ見守るしかなかったというが、「この人が女房だったことを改めて誇りに思う」と書いている。次の歌がある。

この人を 殺してわれも 死ぬべしと

幾たび思い 幾たび泣きし

8年後の2008年、再発し、64歳で帰らぬ人となった。

私は以前、「かげろう」という題で、宮田美乃里という無名(?)の歌人について書いたことがある。実に

エキセントリックな女性で、恋も多く、自殺未遂を繰り返し、フラメンコに熱中したがこれも挫折し、短歌に生きる意味を見出した。29歳で乳がんを発症し、治療を拒否して31歳で亡くなる。その選択と生き方がマスコミに大きく取り上げられ、話題になったが癌の進行によって乳房を維持できなくなりついに手術をした。写真家のアラキーに依頼して、生々しく傷跡の残るヌード写真を写してもらい、短歌とヌード写真がコラボした『乳房 花なり』という本を荒木と共著で出版した。私の手元にあるが大変に美しい写真集である。2005年春、34歳で世を去った。

この傷を 見たまえ神よ 乳ふさを

亡くした女が 一人在るのを

私のキャンサーは主治医の見立てではステージ2だというが、脇のリンパに転移したがん細胞は取り切れていない。何処かの臓器に転移して増殖するかもしれない。しかし、健康であっても私の今後の寿命は知れている。予後何年生存率とかいう数字が問題になるが、その間に別の病気、例えば心筋梗塞などで人生の終わりを迎えることも大いにある。神のみぞ知る、である。

術後一か月もしないうちにデパートなど、激しく動き回ったせいか、一か月半後、突如、38度5分という高熱に見舞われ、初めて救急車のお世話になった。煌々とした明かりに照らされている深夜の救急外来の異様な雰囲気を経験した。それは健常者だったころには想像もできなかった阿鼻叫喚の世界であった。点滴で繋がれ、酸素マスクをつけられ、ストレッチャーで運ばれ、大勢の看護師に取り囲まれ、やはり私はキャンサーなのだ。

いまはしんみりと病人らしく部屋に閉じこもって訪れる秋の気配を窓越しに探している。

成すこともない昼下がり、次の短歌を作ってみた。

一筋に深き傷跡わが乳房

うつし身いまはのぞむことなし

(2019年 9月)